Town Scape
タウンスケープ

飯能市

水と緑の交流拠点　森林文化都市　はんのう

飯能市長　新井 重治氏

市長のメッセージ

飯能市は、都心に近く、豊かな自然が身近にあるという良好な環境を生かし、多くの人が自然との触れ合いを求めて訪れる集客の仕組みや基盤づくりを進めることで、ひと・まち・地域がいきいきと元気で賑わう森林文化都市を目指しています。

子ども医療費の満18歳までの無償化など、引き続き切れ目のない子育て支援を始め、「市民とともにつくる飯能市」をキャッチフレーズに、明るい未来の飯能市を築いていくため、市民と誠実に向き合い、「対話重視のまちづくり」を進めるとともに地に足をつけた着実な市政運営に取り組んでまいります。

はじめに

飯能市は埼玉県の南西部、都心から約50㎞圏内に位置している。関東平野と秩父山地が織りなす地形にあり、山地・丘陵地・台地と、変化に富んだ多様な自然があることが特徴である。西へ行くにしたがい徐々に標高は高くなり、最も高い場所は1,300mを超える。入間川、高麗川の2つの一級河川が北西部から南東部へと流れ、様々な川の姿を見せている。

都心から電車で約40分と交通アクセスも良好であり、市の玄関口となる南東部は市街地が発達している。市はこの豊かな自然の魅力を首都圏近郊における貴重な地域資源と捉え、2005年に「森林文化都市」として自然と都市機能が調和するまちづくりに取り組むことを宣言した。飯能市は市域の約75%が森林であり、その森林は、入間川、高麗川など地域の河川の源流を生み出し、埼玉県民、東京都民の水源となっていることに加え、山地災害の防止や生態系の保全など、地域に広く恩恵をもたらしている。身近にある自然との共生によって、これまでも暮らしや文化、歴史、産業が生まれてきた。

1997年に北欧の童話をモチーフとした「トーベ・ヤンソンあけぼの子どもの森公園」（表紙）が開園、2019年に民間施設「メッツァ」に「ムーミンバレーパーク」が開業、2020年にはフィンランド式のアウトドアサウナやグランピング施設を備えた「ノーラ名栗」が開園するなど、「森林」や「自然」、「北欧」を起点にした文化の発信が続いている。

市をかたちづくる「西川材」

飯能市の森林が源流となる荒川支流の入間川、高麗川、越辺（おっぺ）川流域は「西川林業地」と呼ばれている。江戸時代、この地域からの木材は筏に組まれ、川を利用して江戸へ流送されていた。「江戸の西の川からくる木材」として「西川材」の呼び名が付いた。色、艶が良く、年輪が緻密で節の少ない木材として知られ、経年による反りやねじれが少ない。この地域の風土がスギやヒノキの生育に適したとともに、林業を支えてきた人々が、枝打ちや間伐など、丁寧に手入れを重ねてきたことが、その上質さを際立たせている。

市は公共施設の建築に西川材を多く取り入れており、飯能市立図書館は樹木の林立する森をイメージして建てられた。近代的な玄関をくぐると、木のぬくもりとやさしいスギの香りを感じる空間に出会う。西川材が持つ美しい木目が、見る人に安らぎと風格ある印象を与える。そこは格調高い空間が作り出されている。

西川材の上質さが際立つ飯能市立図書館

飯能市概要

人口(2024年10月1日現在)	78,066人
世帯数(同上)	36,672世帯
平均年齢(2024年1月1日現在)	50.2歳
面積	193.05㎢
製造業事業所数(経済構造実態調査)	156所
製造品出荷額等(同上)	1,364.6億円
卸・小売業事業所数(経済センサス)	528店
商品販売額(同上)	744.4億円
公共下水道普及率	72.1%
舗装率	41.3%

資料:「令和5年埼玉県統計年鑑」ほか

主な交通機関

- JR八高線　東飯能駅
  西武池袋線　飯能駅、東飯能駅、東吾野駅、吾野駅
  西武秩父線　西吾野駅、正丸駅
- 圏央道　狭山日高ICから市役所まで約5km

全国に先駆けたエコツーリズムの取り組み

豊かな自然を持つ飯能市は、「エコツーリズム」の先進自治体としても知られる。エコツーリズムとは、自然や歴史、文化を体験しながら楽しく学び、それらの保全にも責任を持つ観光のあり方である。国では環境省が推進しており、現在、全国で26の地域のエコツーリズムの取り組みを認定している。その中でも飯能市は、全国で最も早く認定を受けた地域だ。

飯能市エコツーリズムは、地域の個性と魅力の源である自然を保全し、人と自然に育まれてきた文化を継承する「エコツアー」として、地域の人が地域の言葉で地域を案内する。人と人とのふれあいと体験を重視し、特に地元有志によるガイド養成に力を入れる。魚釣りや木工体験など、誰もがガイドとしてツアーの実施に関わり、全員参加型の活力のある地域の姿を目指す。この取り組みは、国連が提唱するSDGs（持続可能な開発目標）との関連性が強く、飯能市の市民と森林の豊かな関係を築いている。

地域のガイドが案内するエコツアー

ほしい未来にめぐり逢えるまちに向けて

市は2024年2月に「飯能まちなか未来ビジョン」を策定した。「ほしい暮らしを描き、森林とともに育むまちなか」をキーワードに、10年、20年先を見据えた、人と自然、まちと文化がつながる持続可能性のあるまちづくりを推進する。

市はこれからのまちづくりには市民、事業者、行政など多様な人々が、それぞれの立場から積極的にまちづくりに参画し、密接に連携しながら、自分たちのまちへの誇りや愛着を育んでいくことが大切だとしている。そのためには、市民をはじめとした多様な人々の対話が重要となる。現代的なものだけではなく、もともと地域で育まれたものとの共存と共生をまちづくりに取り入れ、活かし、賑わいを生み出す。

飯能まちなか未来ビジョンでは、居心地が良く、歩きたくなる「まちなかウォーカブル」の実現を目指す。市民の暮らしや出会いの視点を取り入れ、道路整備や、路地や空き地、駐車場などの利活用により、座って寛げる滞在性の高い歩道や、沿道の店先でのにぎわい、マルシェの開催などを行う。市内をより「安全に」「快適に」「楽しく」過ごしたくなる都市環境の整備を進めている。

人々の対話でつくるまちの賑わいが、ほしい暮らしを描き出し、ほしい未来を具現化していく。これまで大切に守り育ててきた森林と文化が、市民のまちへの誇りと愛着となって人々の対話を生み出し、これからの未来を創っていく。（齋藤康生）